【郷土史への扉】

霧島市の地名と歴史

霧島という名は「続日本後紀」の承和四（八三七）年の記述に初めて出てきます。内容は日向の神様に関することです。地名の由来としては、朝夕の霧が深いことからくると思われます。

自治体の名前としての霧島は昭和十（一九三五）年にできた霧島村が最初です。自治体の名前として、霧島という名前は比較的新しいものです。大字の田口・大窪・川北などは鎌倉時代の文献に登場してくる古い地名で、税所氏が領有していました。

新しい地名といえば旧隼人町で、昭和四（一九二九）年に西国分村から名前を変えました。隼人という名前はこのときに付けられました。江戸時代には内山田、内、見次、小田、小浜、住吉、畠中、野久美田、浜市、松永、浅井（朝日）、佳例川（嘉例川）、西光寺、東郷といった村名がありました。畠中村と浜市村はのちに真孝村に名前を変えました。

牧園村は明治二十二（一八八九）年にできました。それまでは踊という地名でしたが、当時小字名だった「牧園」を小学校の名前に使ったことから、村名も牧園に変えたといわれます。

大字は、古代の「和名類聚抄」に仲川という地名があり、上中津川・下中津川のことではないかとされています。また、三体堂には平安時代末期に条里制（古代の区画整理）がしかれていたのではないかと考えられています。中世には万善（万膳）、用松（持松）、三台堂（三体堂）などの地名が見え、近世には巣窪田（宿窪田）や中津川といった名前も出てきます。ちなみに高千穂は昭和二十二年にできた地名です。

古い地名を自治体名に残していたところもあります。国分という地名は古代、大隅国の国府が設置され、大隅国分寺が建立されたことに由来するので大変古い地名です。古い大字もたくさん残っています。

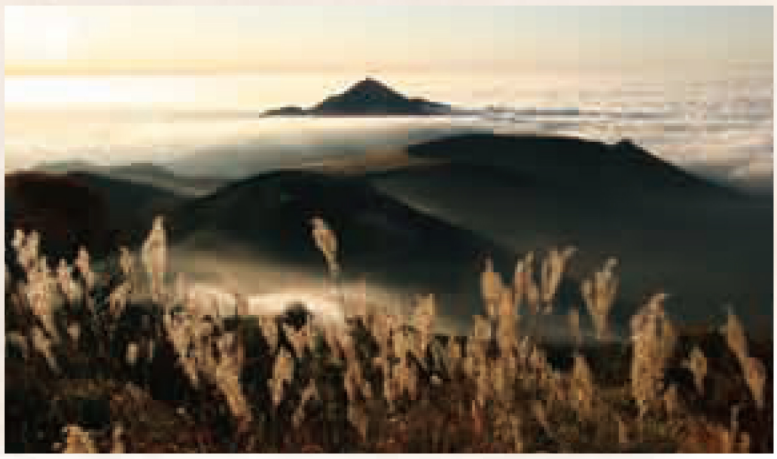
横川という地名も古く、今からおよそ800年前、鎌倉時代の文献に「横川（河）院」として出てくる地名です。現在の大字は近世の上之村、中之村、下之村からきています。

溝辺も「溝部」として横川と同じ文献に出てきます。また、およそ730年前の文献には「在河（有川）、溝部、竹師（竹子）、崎守（崎森・当時は加治木郷内）」と書かれています。近世には麓、有川、三縄、崎森、竹子となって現在にいたります。余談ですが、山ヶ野金山に通じる街道筋に有川村の石原というところがあり、江戸時代の「三国名勝図会」には「石原饅頭」という名物があると書かれています。

中世の福山町は廻と加礼川の地名が文献に書かれています。江戸時代になる前に廻は福山と改名されました。江戸時代は、福山、嘉例川、福沢、福地、国師といった村があり、明治になった時点で福山、佳例川、福沢の三か村、のちに福山浦町、福山、佳例川、福沢、福地の五か村になり、現在は浦町を福山に含めて四つの大字になっています。

明治以降につけられた自治体名は、牧園・霧島・隼人で、江戸時代以前からある地名は国分、横川、溝辺、福山となります。また、各地の大字については、とても歴史のあるものだと分かります。大事にしていきたいものです。小字名についても今後紹介したいと思います。

文責＝坂



お知らせ

11月18日（水）から11月27日（金）まで、国分シビックセンターにおいて「国分郷土館収蔵品展―火山活動と霧島―」を開催します。ぜひご覧ください。